

「VP のは NP だ」構文と「VP 的 is NP」構文の認知メカニズム —その対照研究を兼ねて—

A Cognitive Approach to ‘VP-no-wa NP-da’ Construction with a Contrastive Study on ‘VP-de shi NP’ Construction

陳 潔羽／陳 訪澤
澳門大学人文学院

要旨

本稿は認知文法論の立場から、日本語の「VP のは NP だ」構文と中国語の「VP 的 is NP」構文における「VP の」と「VP 的」の認知メカニズムを検討した。まず、「VP の」と「VP 的」の解読にメトニミー操作が介在するという考えに基づいて、「VP の」と「VP 的」のターゲット選択を分析する。VP の表す過程の中心的な構成要素は際立ちの度合いが高いほどターゲットになりやすい。周辺の構成要素は NP との連動で際立ちの度合いが高くなれば、ターゲットになることも可能である。さらに、この認知メカニズムに基づいて受動の動作主と所有者がターゲットになる可能性について分析する。原則として「VP のは NP だ」構文も「VP 的 is NP」構文も受動の動作主をターゲットとすることができないが、「VP のは NP だ」構文は、NP に「に」、「によって」を付加することによって強制的に「VP の」のターゲットを動作主と解読できるが、「VP 的 is NP」構文ではそれができない。所有者がターゲットになることは、「VP のは NP だ」構文においては自然であるが、「VP 的 is NP」構文においては許容されない。

キーワード:

「VP のは NP だ」構文、「VP 的 is NP」構文、メトニミー、ターゲット、認知メカニズム

「VP のは NP だ」構文と「VP 的 is NP」構文の認知メカニズム —その対照研究を兼ねて—¹

陳 潔羽／陳 訪澤
澳門大学人文学院

1. はじめに

「VP のは NP だ」構文は日本語の名詞述語文の一種である。従来の研究(三上章 1953、渡部真一郎 1979、熊本千明 1989)は、ハ分裂文とガ分裂文との区別の解明、NP が有格かどうかについての分析、また NP と格助詞の共起条件など、文法構造についての考察が中心である。「VP のは NP だ」構文は基底文に基づく分裂操作を経て生成されるとされてきたが、それは表層構造と深層構造の存在を前提としたものである。それと違って、坂原茂(1990)は認知文法論の立場から名詞述語文の主題と述部の関係を考察し、役割(role)と値(value)の関係を成しているかどうかによって名詞述語文を同定文と記述文に分けている。

本稿は坂原茂(1990)の研究を踏まえ、同定文としての「VP のは NP だ」構文を対象とする。このような「VP のは NP だ」構文において、「VP の」はいろいろな役割を表すことができる。例えば、

- (1) a そこに立っているのは警察だ。(動作主)
- b 彼が書いたのはユーモア小説だ。(被動者)
- c 牛乳を飲むのはあのコップだ。(道具)
- d 一番美味しいのは寿司だ。(経験者)
- e 鼻が長いのは象だ。(所有者)
- f 電車が八王子をたつのは今夜の9時だ。(時間)
- g 盆栽があるのは庭だ。(場所)

一方、中国語には、日本語の「VP のは NP だ」構文に相当する「VP 的 is NP」構文があり、日本語と同じ、「VP 的」もいろいろな役割を表すことができる。例えば、

- (2) a 站在那里的是警察。(動作主)
- b 他写的是幽默小说。(被動者)
- c 喝牛奶的是这个杯子。(道具)
- d 最好吃的是寿司。(経験者)

¹ 本研究は澳門大學研究プロジェクト MYRG101(Y1-L2)-FSH12-CFZ の一部である。

- e 鼻子长的的是大象。(所有者)
- f 从 Kapit 出发的是早上 9:00, 约下午 2:30 分会抵达 Belaga。(時間)
- g 种有盆栽的是院子。(場所)

しかし、日本語の「VP の」と中国語の「VP 的」の表す役割はどう決まるのか、まだ完全に解明されていない。本稿は、役割の選択は「VP の」と「VP 的」のメトニミー操作に関わるとし、「VP のは NP だ」構文と「VP 的 NP」構文におけるメトニミー操作を分析した上で、「VP の」と「VP 的」のターゲット選択の認知メカニズムの解明を目的とする。

2. 先行研究と本稿の立場

2.1 先行研究とその問題点

今田水穂 (2011) は、同定文「A は B だ」の成立は次の (一) と (二) の前提が必要だとしている。

(一) 主語の存在前提: 「A は B だ」構文は、A の存在を前提とする。

(二) 他の存在前提: 役割 A が存在するならば、役割 A は値 X を持つ。(今田 2011)
役割とは名詞句の意味・記述内容によって与えられる一種の関数で、時間、状況、コンテキストなどの変化に応じ、記述を満足する個体の集合から適当な値を選択する。名詞句が使用状況に応じて異なる対象を指すという事実は、変域内の要素に対し適当な値を割り当てるという役割の関数的性格で説明できる (Fauconnier 1985、井本秀剛 2001)。

名詞句の役割の解釈は複数以上存在する可能性がある。例えば、(3) の場合では、「妹が自殺したの」という名詞句は、述部を見ない限り、「妹が自殺した人」、「妹が自殺した時間」、「妹が自殺した場所」、「妹が自殺した原因」など、複数以上の解釈が可能である。それでは、会話の参加者はどのように複数以上の役割から一つ選択するのであろうか、それは先行研究では説明されていない。

- (3) 妹が自殺したのは次郎だ。(渡部 1979)

「VP 的 NP」構文にも同じ問題がある。朱徳熙 (1978) は、「VP 的」の読みの数 (p) は動詞の持つ主語と目的語の数 (n) から「VP 的」に現れる主語と目的語の数 (m) を引いたものであると指摘している ((4))。しかし、(5) のように、NP が VP の主語にも目的語にも還元できない場合、朱徳熙の説ではうまく説明できない。

(4) p=n-m

(5) 有毒的蛇咬的是两颗齿痕，没毒的蛇咬的是一排齿痕。

沈家煊(1999)は「VP的NP」構造を考察し、NPの指示対象がVPの表す過程と同じ認知ドメインを共有する場合、NPがVPの意味役割でなくても、「VP的NP」構造は成立すると指摘している。それは(5)の説明にも有効である。「齿痕」(噛み傷)は蛇に噛まれた結果であり、「蛇咬」(蛇が噛む)と同じ認知ドメインを共有するので、文が成立するというわけである。

しかし、(6)はどう説明すればいいのであろうか。(3)と比較してみると分かるように、「VPのはNPだ」構文では、NPがVPの所有格に還元することは許容されるのに対して、「VP的はNP」構文では許容されない。これはさらに考察する必要がある。

(6) *妹妹自杀了的是他。

2.2 本稿の立場

本稿は名詞句「VPの」における「の」は実質的な意味を持たず、ただの補文標識である(陳訪澤2000)という立場を採る。「の」は「(VP+)ひと」、「(VP+)こと」、「(VP+)時間」といった表現に取り替えられるように見えるが、具体的にどれに取り替えられるかはコンテストがなければ決められない。それは、「VPの」における「の」は実質的な意味を持たないことを裏づけている。

筆者は「VPの」と「VP的」を解説するのにメトニミーという認知操作が必要であり、「の」と「的」は先行するVPが表している過程を参照点として²、ターゲットにアクセスするという認知操作を引き起こすものであると考えている。「VPの」と「VP的」はVPの表す過程を一つのまとまりとして指示する場合と、VPの表す過程の構成要素を指示する場合とがあるが、本稿の内容に関わるのは「VPの」と「VP的」が過程の構成要素を指示する用法である。このような考えに基づき、日本語の「VPのはNPだ」構文と中国語の「VP的はNP」構文における「VPの」と「VP的」が表す役割はVPを参照点とするメトニミーのターゲットであるとする。

² 認知文法では、言葉の表す概念は「物体」(thing)と「関係」(relation)に分けられ、「関係」はさらに非時間的關係(atemporal relations)と過程(process)に分けられる。非時間的關係は静的状態を表し、例えば、「高い」、「静か」などである。過程は時間の流れに従って変化する状態を表し、例えば、「飛ぶ」、「落ちる」などである。Langacker(1987)を参照されたい。

メトニミーとはある「対象」を認知する場合、「最も際だった部分」を手がかりとして、把握し難い「対象」を認知していく探索のメカニズムのことである。「最も際だった部分」は「参照点 (reference point)」、「対象」は「ターゲット (target)」と呼ばれる。(Langacker 2004)

例えば、「ピアノを聞く」というと、実際に「聞く」という行為に直接関与する対象は「ピアノ」という演奏するための楽器ではなく、その楽器から発した音である。この場合、「ピアノ」は参照点であり、「ピアノの音」はターゲットである。

メトニミーは隣接性を基にしているが、隣接性とは具体的な物理関係に関わるもの(7)もあれば、抽象的なものもある。例えば、(8)では、「ねじれを生み出した」は過程を表すが、「の」をつけると、「ねじれを生み出した主体」を指示するようになる。過程の参加者は過程が成り立つのに欠かせない部分であり、つまり、過程と参加者は抽象的な隣接性を持っている。この場合、「ねじれを生み出した」ことは参照点であり、「ねじれを生み出した主体」はターゲットである。

(7) 手が足りない

(8) ねじれを生み出したのはこの私だ。 (平成 25 年 6 月 26 日安倍内閣総理大臣記者会見)

つまり、「ねじれを生み出した主体」は役割であり、「この私」という値を選択する。役割とターゲットは一致しているので、役割を選択することはターゲットを選択することに帰結される。

3. ターゲットの選択

沈家煊 (1999) はメトニミーのターゲットの選択は認知ドメインと際立ちの度合いに関わっているとしている。ここでは、まず認知ドメインと際立ちの度合いの概念を紹介し、それからターゲットの選択に影響する要因を分析してみる。

3.1 認知ドメインと際立ちの度合い

認知ドメイン (domain)³とは、概念内容を構成する領域であり、その領域の中のどの部分を際立たせるかによって、言語表現の意味の多様化が実現する (Langacker 1984、

³ 認知ドメインは理想化認知モデル (Idealized Cognitive Model, ICM)、フレーム (frame)、スクリプト (script) といった名目で広く検討されている。Lakoff (1987)、Taylor (1995)、Ungerer & Schmid (1996)、沈家煊 (1999)参照。

1987)。空間、匂い、色、触感などは基本的な認知ドメインであり、それらの複合により構成されるのは抽象的な認知ドメインである（体、親族関係など）。例えば、「息子」という言葉の意味を認知するために、「性別」、「親族関係」などの認知ドメインを基にしなければならない。

メトニミーの場合、参照点と同じ認知ドメインの構成要素であることはターゲットになる必要条件である（沈家煊 1999）。また、VP の意味役割でなくても、VP の表す過程と同じ認知ドメインを共有する限り、「VP の」のターゲットになる可能性がある。認知ドメインは、話し手・聞き手の経験、百科知識及び前後の文脈によるもので、メトニミーの参照点とターゲットと言え、次の認知ドメインに関わるのは一般的である。

- (9) a 容器-中身（例：お風呂が沸いた）
- b 全体-部分（例：手が不足している）
- c 所有者-所有物（例：赤帽子）
- d 物体-性状（例：ちゃんと並ばんかい、このハゲ！）
- e 機関-所在地（例：台北と北京は平和協定について交渉する）
- f 経験者-行為（例：物知り）
- g 動作主-動作-受動者／結果（例：子供が描いたのは絵だ）
- h 動作主-動作-被授与者／目的（例：注文が殺到したのはこの穴子
 ずし）

（沈家煊 1999、例文は筆者）

このように、隣接性とは空間的な関係だけでなく、抽象的な関係を指すものもある。その代表として、継起関係や因果関係(9)g が挙げられる。

例えば、(5)の「歯痕」（噛み傷）は蛇に噛まれた結果であり、「蛇咬」（蛇が噛む）と時間的隣接性を持っている。この場合、「蛇咬」はメトニミーの参照点であり、「歯痕」はターゲットである。

一方、際立ち（salience）とは特定の認知ドメインの部分構造に注意を向けるということである。際立ちの度合いが高いほど、メトニミーの参照点になる可能性が高くなる。一般に、際立ちは次のような原則を守っている。

- (10) a 見えるもの（容器） > 見えないもの（中身）
- b 大きいもの（全体） > 小さいもの（部分）
- c 動くもの（有生物） > 動かないもの（無生物）

- d 近いもの > 遠いもの
- e 具体的なもの（形） > 抽象的なもの（音声）

（沈家煊 1999）

際立ちの度合いは話者の視点により逆転することもよくある。例えば、(7)では、手が部分で、人（体）が全体であるが、手は仕事に直接に関わるものなので、近いものは遠いものより際立つという原則(10)dにより、手は参照点となり、人（体）はターゲットとなるわけである。

「VP のは NP だ」構文の場合、「VP の」のターゲットは動作主、受動者、道具、結果、場所、時間、被授与者の中の何れでも、VP の表す過程の構成要素なので、過程と「部分—全体」の関係をなす。(10)bによると、全体としての過程は際立ちの度合いが高く、話者はそれを参照点とし、構成要素をターゲットとする。

3.2. 構成要素の際立ちの度合い

参照点とターゲットとの間ばかりでなく、VP の表す過程の構成要素の間にも際立ちの度合いの差が見られる。

過程の構成要素の中にも、過程の成立に不可欠なものと、そうでないものがある。例えば、「運転する」という過程は動作主、受動者、時間、場所などの要素から構成されるが、(9)g の「動作主—動作—受動者」という認知ドメインによると、時間や場所より、動作主と受動者が中心的な要素である。また、(10)d の際立ちの原則によると、中心的な要素の方（近いもの）が周辺的な要素（遠いもの）より過程との関係が密接であり、際立ちの度合いが高い⁴。そのため、中心的な構成要素はターゲットになりやすいのに対して、周辺的な要素はターゲットになりにくい。例えば、(11)a、(11)b と(12)a、(12)b は自然な表現であるが、(11)c、(11)d と(12)c、(12)d は自然な文とは言えない。

- (11) a 私はセーターを着たのを殴った。（ターゲット：動作主）
- b コミュニティ掲示板のお絵カキコで描いたのを動画にしてもらいました。（ターゲット：受動者）
- c *会議が終わるのにクーラーを消してください。（ターゲット：時間）
- d *私は李さんが授業をしているのから帰ってきたのだ。（ターゲット：場所）

⁴ ここでの「際立ちの度合いが高い」というのは、他の潜在的ターゲットと比較してのものであり、メトニミーの参照点と比べると、やはり低い方であるということに注意されたい。

- (12) a 我做的比较好吃。(ターゲット：動作主)
 b 我把书给了那个穿黄衣服的。(ターゲット：受動者)
 c *你用他跑的(方式) 试试看。(ターゲット：時間)
 d *等不到他来的(時間)。(ターゲット：場所)

しかし、時間や場所のような周辺の構成要素でも、「VP のは NP だ」構文と「VP 的是 NP」構文であれば(13)と(14)のように、「VP の」と「VP 的」のターゲットになれる(黄毅燕 2007)。それはなぜであろうか。

- (13) a 会議が終わるのは午後 3 時だ。
 b 李さんが授業をするのはあの女子学校だ。
- (14) a 他跑的是马拉松。
 b 他来的是昨天, 不是前天。

既に述べてきたように、中心的な構成要素は際立ちの度合いが高いからターゲットになりやすい。逆に言うと、中心的でないものでも、際立ちの度合いを高くすることを通して、ターゲットになれるのである。それができるのは、「VP のは NP だ」構文 / 「VP 的是 NP」構文の機能によるものである。それは「VP の」 / 「VP 的」のターゲットと、NP の指示対象との間に同一関係を構築することである。構文要素の指示対象は文中の他の構文要素との相互作用により確認される(大田垣仁 2009a、2009b、2010、Ruiz de Mendoza 2011)。そのため、「VP の」 / 「VP 的」のターゲットは NP の指示対象と連動しながら決定されるのである。具体的に言うと、VP の構成要素のうち、NP の指示対象の範疇と一致するものなら、際立ちの度合いが高くなる。そのため、たとえ周辺の構成要素であっても、ターゲットになれるわけである。

まとめてみると、「VP のは NP だ」構文と「VP 的是 NP」構文では、VP の表す過程を構成する中心的な要素は際立ちの度合いが高いので、「VP の」 / 「VP 的」のターゲットになりやすい。一方、周辺の要素は、NP との連動で際立ちの度合いが向上され、ターゲットになることも可能である。これで、「VP のは NP だ」構文と「VP 的是 NP」構文におけるメトニミー操作を分析することを通して、「VP の」と「VP 的」のターゲットを選択する認知メカニズムが明らかになった。

3.3 反例とその解釈

3.3.1 受動の動作主

以上の検討で「VP のは NP だ」構文と「VP 的 NP」構文は NP との連動により、過程の周縁的な構成要素をターゲットとすることができるということが分かった。しかし、VP が受動になる場合、「VP の」／「VP 的」は動作主をターゲットとすることができなくなる⁵。それは何故であろうか。

(15) *金魚が食べられたのは猫だ。(ターゲット：動作主)

(16) *金魚被吃的是猫。(ターゲット：動作主)

受動文の機能は動作主の脱焦点化である (Shibatani 1985, Langacker 1987)。つまり、話者は意識的に或いは無意識的に動作主の際立ちの度合いを弱めるために受動文を使うというわけである。そのため、動作主が明示されない受動文はプロトタイプであり、無標記 (unmarked) である。一方、「VP の」と「VP 的」のターゲットになるものは、VP の表す構成要素の中で際立ちの度合いが高いものでなければならない。明らかかなように、脱焦点化とターゲットの選択は相容れないため、VP が受動になる場合の「VP の」と「VP 的」は動作主をターゲットとすることは不可能である。

しかし、稀に「VP のは NP だ」構文では NP に「に」、「によって」などの格助詞を付加することで、動作主の際立ちの度合いを高め、受身を表す「VP の」のターゲットを強いて動作主と解釈させることもある。

(17) a シーザーが殺されたのはブルタスにだ。

b ニホンナシの育種は、菊池によって初めて計画的かつ組織的に行われたが、本格的に育種事業として取り組まれたのは年園芸試験場によってである。

⁵ しかし、次のような例が見られる。

i 「『マルテ・ラウリッツ・ブリッゲの手記』を注意して読む時、最も打たれるのは如何なる場合にも人生の大きな現実と同化しようとしない『形』の純粹さである。

ii 現在では日本最大の釣り組織になっており、この中で私が最も魅せられたのは大物申請制度でした。

iii キャラクターや歌、色々あるけど一番惹かれたのは？

これらの例では、VP を構成する動詞は「(心を) 打つ」、「惹く」、「魅する」など、感動、魅惑を表す言葉で、その受動の形は人間の心理状態を表す表現として既に定着している。「打たれる」、「惹かれる」、「魅せられる」を独立の見出しとして掲出する辞書があるというのはその裏づけである。そのため、このような表現を受動としない。

中国語では、動作主を提示するマーカーがないため、「VP 的は NP」構文において、動作主の際立ちの度合いを高めることで、受動を表す「VP 的」のターゲットを動作主と解釈させることは難しい⁶。

3.3.2 所有者

「VP のは NP だ」構文では、VP における属格名詞句の指示対象（以下、「所有者」と称する）は「VP の」のターゲットになれる。例えば、

- (18) a 鼻が長いのは象だ。
b 妹が自殺したのは次郎だ。（再掲(3)）
c 松下がスポンサーになっていたのは「パナソニック・レーシングチーム」。

(18)から分かるように、所有者が「VP の」のターゲットになるには、「物体-性状」の認知ドメインが不可欠である。例えば、「鼻が長い」というのは「象」の性質であり、参照点として、所有者をターゲットとするのである。

「VP 的は NP」構文でも、所有者が「VP 的」のターゲットになれるが、使用条件が限られている。

まず、所有物は VP の表す過程のトラジェクター (trajector、認知ドメインの中でもっとも注意される部分。普通、文の主語になる) である場合、ターゲットになる可能性が高くなるが、ランドマーク (landmark、トラジェクターの次に注意される部分。普通、文の目的語になる) である場合、ターゲットになることは難しい。「VP のは NP だ」構文では、この制限はない。

- (19) a 车借给了李四的是张三。
b *李四借了车的是张三。

また、所有関係というのは譲渡可能の関係(18)c と譲渡不可能の関係(18)a、(18)b に分けられる。また、譲渡可能の関係と譲渡不可能の関係の間に連続性が見られる。例えば、「身体」、「親族」、「一般の物体」は次のような階層になり、左の方へ行くと譲渡不可能の性質が強くなる (董秀芳 2012)。

⁶ CCL コーパスで調べた結果、VP が受動を表す「VP 的」が動作主をターゲットとする例は一つのみ見つかった。本稿はそれを孤例として取り扱わないことにする。

i 庠比席克常被征住的是希特勒的口才，而不是他谈的内容。

身体 > 親族 > 一般の物体

譲渡不可能の性質が強いほど、VP の表すのは所有者の固有的な性質であると言える。固有的な性質が所有者に近いというのは自明の理である。近いものは遠いものより際立つので、譲渡不可能の関係にある所有者は譲渡可能の関係にある所有者より「VP 的」のターゲットになりやすい。例えば、「鼻子长」というのは「大象」の体の一部なので、(20)a は自然な文である。一方、(20)b と(20)c では、「妹妹自杀了」と「松下当赞助商」は「他」と「Panasonic 车队」の固有的な性質ではないため、文は成立しないのである。「VP のは NP だ」構文では、この制限はない。

- (20) a 鼻子长的是大象。
b *妹妹自杀了的是他。(cf. 是他(的)妹妹自杀了。)
c *松下当赞助商的是 Panasonic 车队。

ところが、所有者と VP の表す性質との緊密度を高めることで、譲渡可能の所有者を「VP 的」のターゲットにすることも少なくない。CCL コーパス（北京大学中国言語学研究センター現代中国語コーパス）で調べた結果、所有者が「VP 的」のターゲットになる場合、VP の中に最大級を表す「最」、比較を表す「更」、順位を表す「第」、排他を表す「唯一」のような表現が現れるのはほとんどである (21)。

- (21) a 年纪最小的是区卓跟何守礼。
b 其实合作潜力更为巨大的是在两国中小企业间的经常贸易。
c 游泳奖牌总数排在第二位[的是]澳大利亚。

最大級、比較、順位、排他というのは、ある範囲の中で、対照物同士から構成される序列における位置づけを表すものである。「最」、「更」、「第」、「唯一」のような表現を捉えるための認知ドメインは対照物同士とその序列より構成される。この認知ドメインにおいて、序列における位置づけは各対照物にとって中心的な性質であり、対照物との緊密度が高い。

「VP 的 NP」構文では、「最」、「更」、「第」、「唯一」を使うことを通して、VP は所有者が序列における位置づけを表し、所有者との緊密度が高くなる。そのため、所有者は過程の他の構成要素より際立ち、ターゲットになることが可能である。

このように、ターゲット選択のメカニズムによると、これらの制限は所有者の際立ちの度合いを高めるための手段である。

4. 終わりに

以上、認知文法の立場から、同定文としての「VP のは NP だ」構文と「VP 的は NP」構文における「VP の」と「VP 的」の解読にメトニミー操作が介在するということを論証し、「VP の」と「VP 的」は VP の表す過程を参照点として過程の構成要素をターゲットとしていることが明らかになった。

「VP の」と「VP 的」におけるメトニミー操作は、まず、参照点とターゲットが同じ認知ドメインにあることを必要とする。また、VP の表す過程の中心的な構成要素は際立ちの度合いが高いほどターゲットになりやすい。一方、周辺的な構成要素は NP との連動で際立ちの度合いが高くなれば、ターゲットになることも可能である。

次に、このターゲット選択の認知メカニズムに基づいて、受動の動作主がターゲットになる可能性について検討した。一般的には、受動の動作主は「VP の」と「VP 的」のターゲットになれないが、「VP のは NP だ」構文では、NP に「に」、「によって」などを付加することによって、強制的に「VP の」のターゲットを動作主と解読させることが可能である。しかし、「VP 的は NP」構文の場合、動作主のマーカがないため、強制解読はできない。

最後に、両構文において所有者がターゲットになる可能性について考察した。「VP のは NP だ」構文では、所有者がターゲットになるのは自然であるが、「VP 的は NP」構文では、大きな制限を受けている。それは所有者と VP の表す性質との緊密度を高くしなければならないということである。ただし、なぜ中日両言語にこのような差が見られるのか、これを今後の課題にしたい。

「VP のは NP だ」構文と「VP 的 NP」構文の認知メカニズム
—その対照研究を兼ねて—

参考文献

- 今田水穂 (2011) 「名詞述語文の焦点の質的特性—主語焦点と述語焦点」『日本語文法』11(1)
- 井元秀剛 (2001) 「メンタルスペース理論における定名詞句の指示について」『言語における指示をめぐって』(言語文化研究プロジェクト2000), 大阪大学大学院言語文化研究科
- 大田垣仁 (2009a) 「指示的換喩と意味変化—名前転送における語彙化のパターン」『日本語の研究』第5巻4号
- (2009b) 「名詞の関数的な側面からみた指示的換喩の2つのタイプ—名前転送と役割転移—」『KLS』29
- (2010) 「換喩と述定—内の換喩における流動的な名詞句解釈のヴァリエーションと成立可否の観点からみた—」『語文』94
- 黄毅燕 (2007) 「“VP+的(+NP)” 与 “VP+ ‘の/NP’” 自指转指的对比」『解放军外国语学院学报』1.
- 熊本千明 (1989) 「日・英の分裂文について」『佐賀大学英文学研究』17
- 坂原茂 (1990) 「役割, ガ・ハ, ウナギ文」日本認知科学会 (編)『認知科学の発展』3巻講談社.
- 朱德熙 (1978) 「‘的’字结构和判断句」『中国语文』(1-2)
- 沈家煊 (1999) 「转指和转喻」『当代语言学』1
- 陳訪澤 (2000) 『現代日本語主題句研究』大連理工大学出版社
- 董秀芳 (2012) 「領属转喻与汉语的句法和语篇」『汉语学习』6
- 西山祐司 (1985) 「措定文・指定文・同定文の区別をめぐって」『慶応義塾大学言語文化研究所紀要 第17号』135-165
- 三上章 (1953) 『現代語法序説』(1972復刊) くろしお出版
- 渡部真一郎 (1979) 「日本語の分裂文について」『英語と日本語と—林栄一教授選歴記念論文集』くろしお出版
- Fauconnier, G. 1985. *Mental Spaces*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lakoff, G. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal About the Mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. 1984. “Active Zone”, *Proceedings of the Tenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*.
- . 1987. *Foundations of cognitive grammar, Volume I: Theoretical prerequisites*. Stanford University Press.
- . 2004. “Metonymy in Grammar”, *外国語* No.6. 2-24.
- Ruiz de Mendoza Ibáñez, F.J. 2011. “Metonymy and cognitive operations”, in R. Benczes, A. Barcelona Sánchez & F. J. Ruiz de Mendoza Ibáñez (eds.), *Defining Metonymy in Cognitive Linguistics: Towards a Consensus View*. Amsterdam, Netherlands: John Benjamin, 103-124.
- Shibatani, Masayoshi. 1985. "Passives and related Constructions." *Language*. 61, 821-848.
- Taylor, J. R. 1995. *Linguistic Categorization*. Oxford: Clarendon Press.
- Ungerer, F. & Schmid, H. J. 1996. *An Introduction to Cognitive Linguistics*. London: Longman.